

# 大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 7 1 集

長岡京跡右京第 1273-2 次調査  
大山崎町第 81 次遺跡確認調査



2 0 2 5

大山崎町教育委員会







# 大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 7 1 集

長岡京跡右京第 1273-2 次調査  
大山崎町第 81 次遺跡確認調査



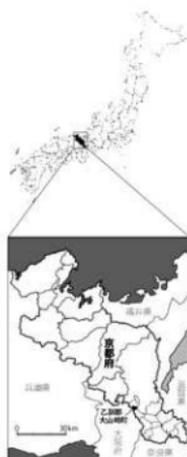
2 0 2 5

大山崎町教育委員会



## 例 言

1. 本書は、大山崎町教育委員会が令和5年度に実施した国庫補助による発掘調査の報告書である。
2. 座標系は、日本測地系の第VI座標系を主として用いた。これは、これまでの調査成果との整合性を重視したためである。ただし、世界測地系の座標を併記している。両測地系の座標値は、相互の変換作業は行わず、それぞれ実地に設置した既存点から実際に測量して求めた。
3. 調査回数については、以下の略号を用いた。  
長岡京跡・宮城 (P)、左京城 (L)・右京城 (R)、山城国府跡 (K)・山崎津跡 (T)・山崎城 (YJ)。本書で調査回数の区分を表す場合は、上記の括弧内に示したアルファベットの略称を用いる場合がある。
4. 各調査回数に付された地区名については、高橋美久二1977「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要1977』)による小字名を基にしたアルファベット表記の地域区分に準じ、同一地区内における調査の回数は、アラビア数字を末尾に付して示している。
5. 地域区分については、「1:25,000土地条件図京都南部」(国土地理院1966年印刷)、「長岡京市域地形分類図」(『長岡京市史』資料編一付図2,1991年)を参照した。
6. 本文中で表記した「西国街道」は特に断らない限り府道西京高槻線を指す。
7. 発掘調査及び整理作業では、以下の方々に参加・協力を得た(敬称略・五十音順)。  
株式会社サポートスタッフ  
調査整理員:天谷明子・坂林彩也・村上優美子  
町立大山崎中学校職場体験実習生:鈴木美結・宮下紡・森田陽子
8. 本書の作成は、大山崎町教育委員会事務局 生涯学習課 文化芸術係が担当した。松崎俊郎・八木麻里の助言と協力を得て、編集・執筆は、菅生薫が担当した。
9. 表紙のカットは、大山崎町第81次遺跡確認調査出土の軒平瓦 報告番号1(縮尺4分の1)である。



## 目 次

1. 令和5年度における発掘調査 ..... 1
2. 長岡京跡右京第1273-2次(7ANSSR-10地区・7ANSSZ-9地区)調査報告 ..... 1
3. 大山崎町第81次遺跡確認(7YYMS' SS-17地区)調査報告 ..... 8



## 1. 令和5年度における発掘調査

大山崎町教育委員会が令和5年度に実施した調査は3件である(表1)。このうち、国庫補助事業による調査が2件(表1、番号1・2)、開発等の工事に伴う原因者負担の調査が1件であった(表1、番号3)。本書では、このうち、前者の調査成果を収録する。

長岡京跡右京第1273-2次調査では、中世の農耕関連遺構とみられる正方位を指向した区画溝を検出した。また、白味才遺跡における大山崎瓦窯の範囲確認調査(大山崎町第81次遺跡確認調査)では、IK77次調査で検出したSX09の東張り出し部分と考えられる遺構を検出した。

## 2. 長岡京跡右京第1273-2次 (7ANSSR-10地区・7ANSSZ-9地区) 調査報告

調査地 京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字里ノ後26-1、26-6、27-1、28-1

調査期間 令和5年10月20日

調査面積 160㎡

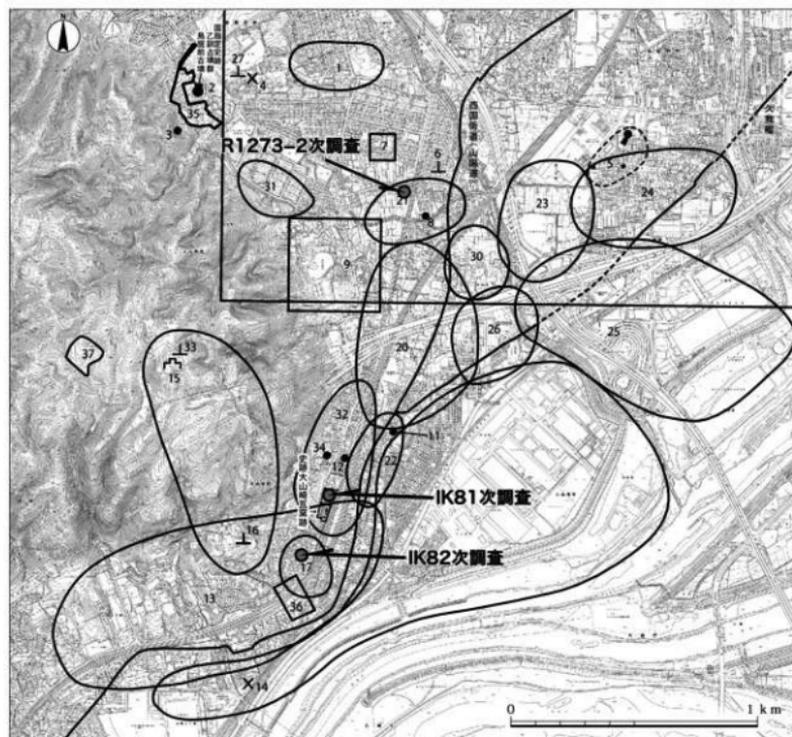
### 1. 位置と環境

当該地は、標高25.5m～27.7mの扇状地に立地する。調査地の南には久保川が東北東に流れ、桂川の支流である小泉川に注ぐ。長岡京の条坊復原によれば、長岡京跡右京九条二坊十七町・十八町にあたり、また、縄文時代～中世の久保川遺跡にも含まれている。周辺では、調査地の東側で実施されたR735・R786・R884次調査において、古代の庭園の洲浜と評価された「礫敷き遺構」が検出され、火付け木やヒノワ様の文様を記した墨書石が出土した。また、久保川の南側で行われたR873次調査では、奈良時代後半の土器21点に、「大宅」、「麻呂」、「大」、「宅」、「富」といった墨書が確認された。こうした調査成果からは、当地を一定の社会的階層に属する識字層が占地していた状況が見てとれる。令和4年度に実施したR1273次調査においては、前述の礫敷き遺構に類似する中世の整地遺構を検出したほか、奈良時代の遺物包含層から鳥鈕蓋が出土した。鳥鈕蓋は奈良時代後半～平安時代前期にかけて愛知県猿投窯跡群で生産された灰軸陶器(または原始灰軸陶器)であり、類例が平城京、平安京、美濃国分寺、尾張国分寺等で出土している特徴的な遺物である。奈良時代の久保川遺跡の性格を知るうえで重要な成果といえよう。

また、当地の西には円明寺が位置している。円明寺は11世紀中頃には存在していたと考えられており、13世紀前半には西園寺公経による円明寺山荘の経営が始まった。こうした荘園開発に関すると考えられる遺構は散在的に検出されているが、その全体像は不明な点が多い。

表 1 令和 5 年度発掘調査一覧

番号	調査 回数	地区名	調査地	調査 機関	調査 面積	原因者	調査 期間	所収
1	長岡京跡右京 第 1273-2 次調査	7ANSSR-10・ SSZ-9 地区	大山崎町字円明寺小字 里ノ後 26-1、26-6、 27-1、28-1	大山崎町 教育委員会	160 m <sup>2</sup>	詳細分布調査	231020	本報告書
2	第 81 次 道跡確認調査	7YYSM <sup>*</sup> SS-17 地区	大山崎町字大山崎小字 白味才 39-3	大山崎町 教育委員会	53 m <sup>2</sup>	範囲確認調査 (国庫補助事業)	240124 ～ 240325	本報告書
3	第 82 次 道跡確認調査	7YYSM <sup>*</sup> BD-3 地区	大山崎町字大山崎小字 琵琶谷 7	大山崎町 教育委員会	104 m <sup>2</sup>	宅地造成に伴う発掘 調査	240322 ～ 240419	大山崎町 第 72 集



## 遺跡名

1 脇山遺跡	9 円明寺跡	14 山崎橋跡	22 堀尻遺跡	32 白味才遺跡
2 鳥居前古墳	11 傍示の木古墳	15 山崎城跡	23 松田遺跡	33 古城遺跡
3 小倉古墳	12 白味才古墳	16 銭原遺跡	24 宮脇遺跡	34 白味才西古墳
4 石倉集石遺跡	13 大山崎遺跡群	17 山崎遺跡	25 下植野南遺跡	35 鳥居前西遺跡
5 境野古墳群	河陽離宮跡	18 長岡京跡	26 算用田遺跡	36 山崎鹿寺(山崎院跡)
6 葛原親王塚遺跡	相応寺跡	19 山崎津跡	27 鳥居前遺跡	37 椎尾遺跡(慈悲尾山寺跡)
7 葛原親王屋敷跡遺跡	山城国府跡	20 百々遺跡	30 金藏遺跡	
8 里の後古墳	山崎駅跡	21 久保川遺跡	31 西法寺遺跡	

遺跡の番号は、京都府教育委員会2004年発行『京都府遺跡地図』(第3版)に準じたため欠番が存在する。

第 1 図 大山崎町遺跡地図と令和 5 年度に実施した調査地 1:20,000

## 2. 調査経過

本調査は宅地造成に伴う擁壁工事により遺構面が露出したため、緊急的に詳細分布調査として遺構平面の記録調査を実施した。調査は令和5年10月20日に実施した。

## 3. 基本層序

本調査地の基本層序は次の通りである。

第1層は、暗灰色壤土であり、現在の田畑地表面を形成する層である。

第2層は、橙褐色粘質土であり、現在の田畑に対応する床土層である。

第3層は、灰褐色粘質土であり、旧耕土層である。

第4層は、黄褐色粘質土であり、旧耕土層に対応する旧床土層である。

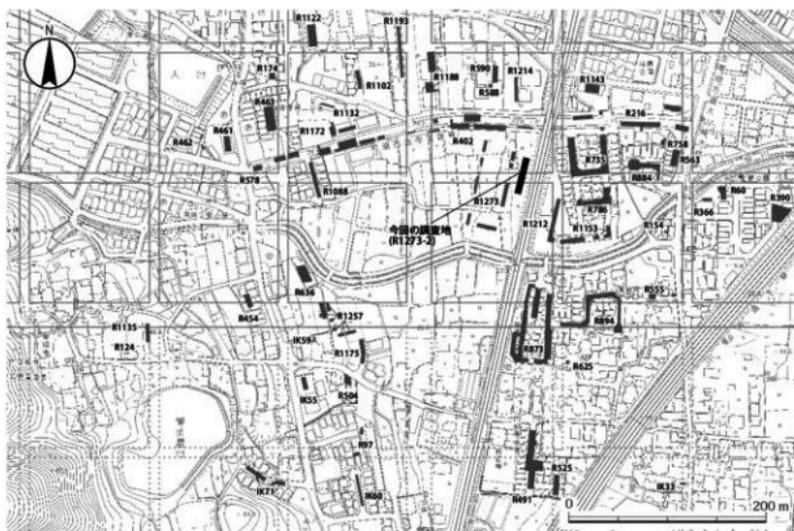
第5層は、灰褐色砂質土である。

第6層は、褐色砂質土である。

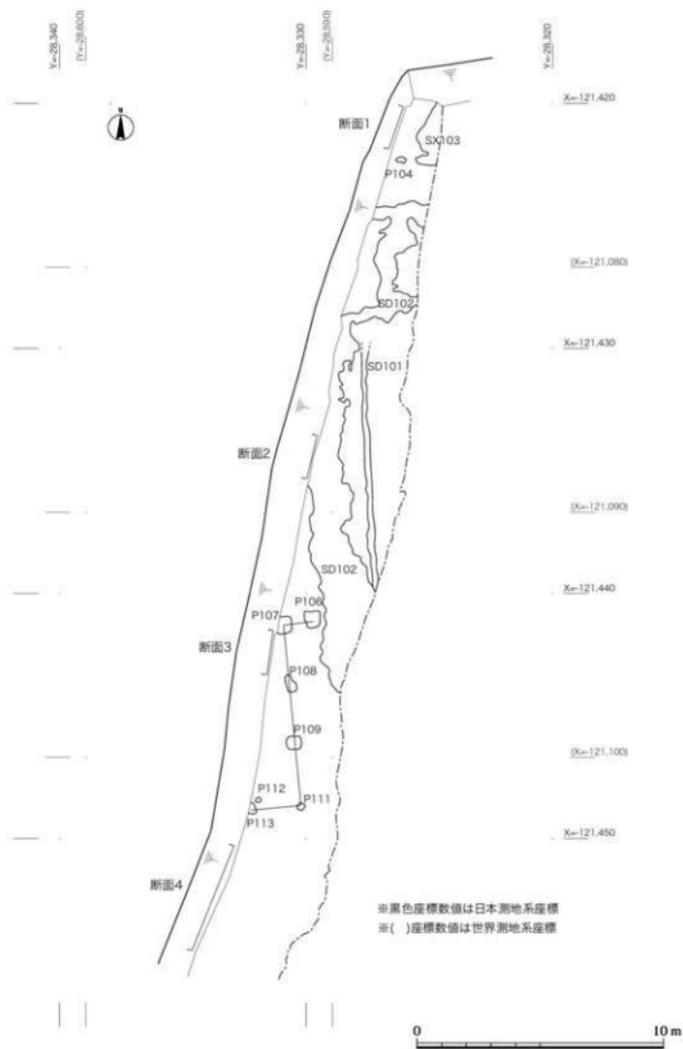
第7層は、暗灰褐色粘質土である。

第8層は、黄褐色粘性砂礫であり、当該地の地盤を形成する堆積層である。

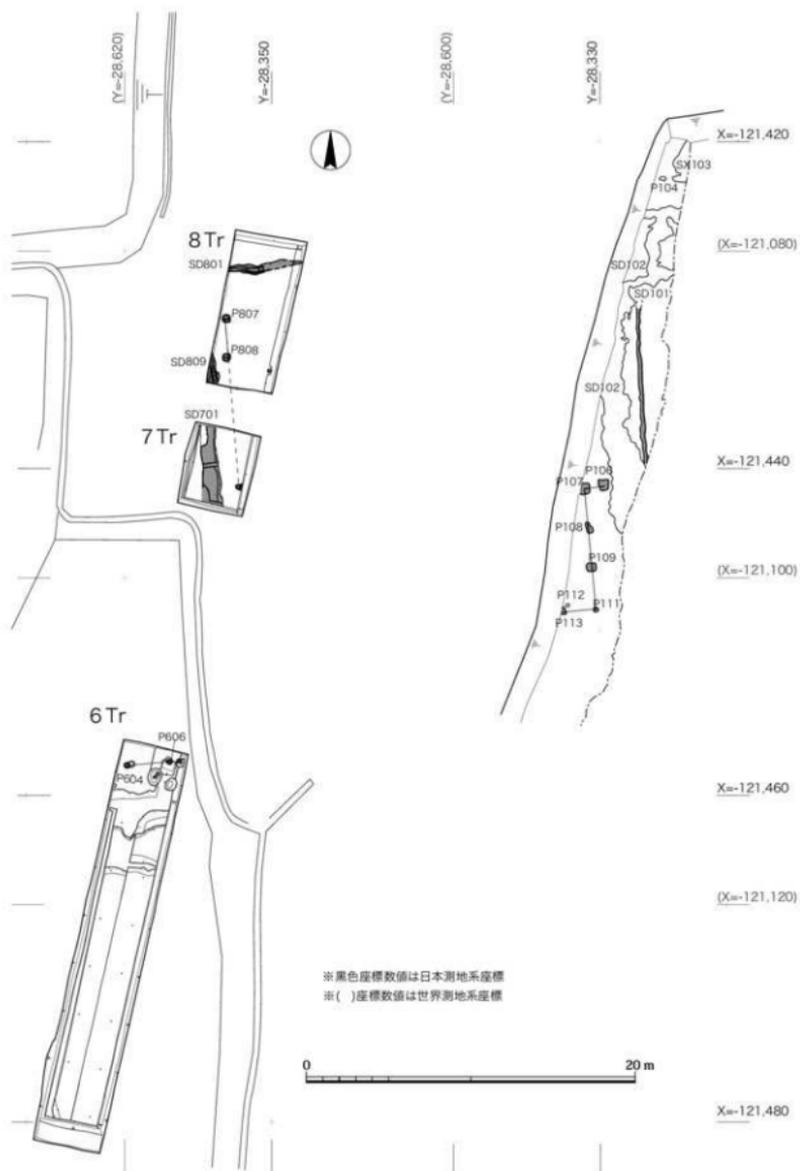
遺構は、第8層上面で検出した。



第2図 周辺の調査と調査位置図 1:5,000



第 3 図 調査区全体図 1:200



第4図 R1273次調査との位置関係 1:300

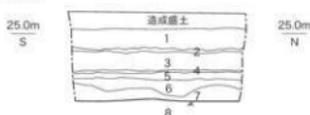
断面1



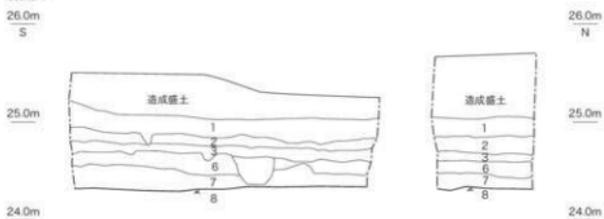
断面2



断面3



断面4



- 1 灰色壤土(耕土)
- 2 棕色粘質土(φ1mm以下の砂粒を多く含む)(床土)
- 3 灰褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む。マンガン粒を多く含む)(旧耕土)
- 4 黄褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む。土師器小片をわずかに含む)(旧床土)
- 5 灰褐色砂質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む)
- 6 褐色砂質土(φ0.5mm以下の砂粒を多く含む。土師器片を少量含む)
- 7 暗褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む。φ20mm以下の砂粒を多く含む)
- 8 黄褐色粘質土(φ5mm以下の砂粒を多く含む)(地盤層)
- SD102 暗灰褐色粘質土(φ20mm以下の円礫を少量含む。φ1mm以下の砂粒を多く含む。炭片・土師器片を少量含む)



第5図 断面図 1:50

## 4. 検出遺構

溝 SD101 第8層上面検出した直線の溝である。SD102に先行し、北側では底面が高くなり途切れるため遺構が後世に削平されたと考える。溝の走向はN 11° 24' 00"Wである。

溝 SD102 第8層上面で検出した溝である。南北溝と東西溝がT字状に交差する。溝埋土の掘削ができなかったため、遺物による遺構の年代決定はできない。溝の南北部分の走向はN 14° 36' 18" Wである。

不明土坑 SX103 調査区北端で検出した不整形の土坑である。

ビット P104 調査区北端で検出したビットである。

柱穴 P106-109・P111・P113 第8層上面で検出した柱穴である。南北方向の柱筋の中軸は溝 SD102と並行している。柱穴の心々間隔は、P106とP107は1.17m、P107～P109、P111は2.38～2.58m、P111とP113は2.04mである。埋土から土師器と製塩土器の細片が出土した。

## 5. 出土遺物

本調査では、須恵器、製塩土器、瓦器が出土したが、細片であり極めて少量であったため、図化できるものはなかった。

## 6. まとめ

今回の調査はR1273次調査の調査区に近接し、当該トレンチにおいては中世の遺構を検出しているため、両調査での成果を比較し、まとめにかえたい。

R1273次調査では5つのトレンチにおいて中世と考えられる井戸や柱穴、礫が主体の整地遺構を検出し、中世には農耕関連遺構が当地に広がっていたと考えた(菅生薫 2024)。このうち、特に6・7・8トレンチが今回の調査地に近接しており、それらのトレンチで検出した遺構と本調査で検出した遺構を以下で比較したい。なお、遺構名が600番台、700番台、800番台の遺構はそれぞれR1273次調査の6・7・8トレンチで検出した遺構、100番台の遺構は今回の調査で検出した遺構である。

まず、今回の調査でもR1273次調査でも地盤層上面で遺構を検出している。標高は今回の調査が24.2m、R1273の7トレンチが25mで地盤層上面を検出しており、東に1° 9' 33"傾斜している。

次に遺構の配置であるが、P106とP107が成すラインとP111とP113が成すライン、P604とP606の中軸ラインの走向が一致する。また、P107からP111の柱穴が成すラインは、SD101、SD701、P807とP808が成すライン、SD809の走向と一致し、SD801はこれと90°の角度をなす。

柱間については、P604とP606の心々間隔は2.6mであり、P807とP808心々間隔は2.38mである。今回の調査で検出した柱穴の心々間隔とも近似するまた、R1273次の7トレンチで検出した土坑は

先述の P807・P808 と柱筋が揃う。両者の心々間隔は 8.02 m であり、概ね柱間 3 間分の距離を有する。

遺構の平面形については、P106、P107、P109、P113 は隅丸方形を呈する。R1273 次の 7・8 トレンチで検出した土坑も隅丸方形であり、両者の関連を示唆する。一方で R1273 次の 6 トレンチで検出した P604 と P606 は円形であり、掘削された契機が異なる可能性がある。

これらのことから、R1273 次の 7・8 トレンチで検出した柱穴と本調査で検出した柱穴は方位や柱間、遺構の形状等が類似していることが指摘できる。調査範囲に限られるため断定はできないが、一連のものとして構築された可能性がある。R1273 次の 6 トレンチで検出された柱穴も関連する遺構である可能性があるが、相違点もみられた。これらの柱穴群の柱間が 2.3 ～ 2.5m と広いことや建物状に柱穴が連続しないことに鑑みると、柵列であったと考える方が自然かもしれない。R1273 次の 7・8 トレンチで検出された SD701・SD809 については現代の田畝に伴う溝である可能性が指摘されているが、今回の成果は中世の遺構の方が現代の地割りをある程度規定している可能性を示唆した。

なお、R1273 次調査で検出した「礫が主体の整地遺構」を今回の調査地の南側で確認した。遺構の残存状況が悪く図化できなかったが、壁面でも地盤層上面に整地遺構が観察できた。R1273 次調査と R735 次調査の間をつなぐ成果といえよう。

以上のことから、中世の久保川遺跡においては柵や溝で土地を区画するような土地利用のあり方が伺えた。当地の西側には中世円明寺の推定地があり、13 世紀には西園寺公経による荘園経営が始められたと考えられている。これらの調査で検出された遺構がそうした荘園開発の痕跡として捉えられるのか、今後の調査に期待したい。

#### [参考文献]

- 古関正浩 2006 「長岡京跡右京第 735 次 (7 ANSSR- 4 地区) 発掘調査報告・長岡京跡右京第 786 次 (7 ANSSR- 6 地区) 発掘調査報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 33 集 大山崎町教育委員会
- 菅生薫 2024 「長岡京跡右京第 1273 次 (7 ANSSR-10 地区・7 ANSSZ-9 地区) 発掘調査報告」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 70 集 大山崎町教育委員会

## 2. 大山崎町第 81 次遺跡確認調査 (7YYMS' SS-17 地区) 報告

調査地 京都府乙訓郡大山崎町字大山崎小字白味才 39-3

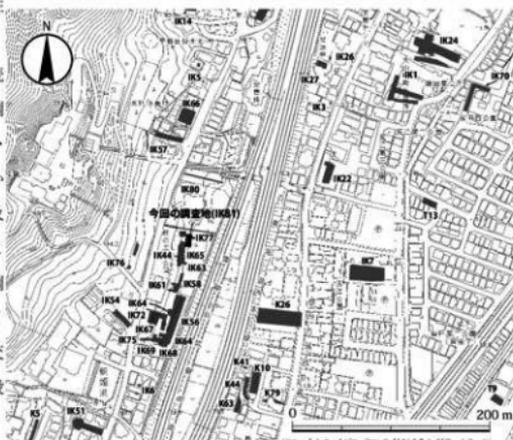
調査期間 令和 6 年 1 月 24 日～令和 6 年 3 月 25 日

調査面積 53 m<sup>2</sup>

## 1. 位置と環境

当該地は、標高 27m～29m の天王山山麓に位置している。南側には国史跡大山崎瓦窯跡が立地しており、規格性の高い 10 基の瓦窯が整然と並ぶ状況が検出されている。検出された窯は焚口を南側にもつ 1・9～12 号窯（B 群瓦窯）と焚口を東側にもつ 2～6 号窯（A 群瓦窯）の 5 基ずつに分類することができる。両群を構成する窯の中軸の心々間隔は平均 5.9m である。A 群・B 群の焼成室側には、窯と約 4.5m の距離をもって窯と平行に排水溝が通っている。この 2 つの窯群と 2 条の排水溝はそれぞれ 94° の角度で構成され、排水溝は交点で交わり東流する。2 条の排水溝で囲まれる区域に瓦廃棄土坑が検出されているため、この区域が焼成品の仕分け場所となっていたことがうかがえる。つまり、窯と排水溝をほぼ直角に配置することで運搬動線の短縮と排水施設の共有を計っていることが分かる。焚口前面には船底状の遺構があり、焼成後の灰などをかき出すための施設だったと考えられる。同じく焚口前面には柱穴が検出され、焚口前面を覆う掘立柱建物の存在が示唆される。また、焚口側の構造が発掘調査により明らかとなっている A 群では、5 基の窯をさらに 2 基・2 基・1 基の支群に分けるように、窯と窯の間に舌状の張り出しが検出された。一方、史跡指定地の北側、つまり今回の調査地付近では 7 号窯・8 号窯と瓦廃棄土坑からなる C 群瓦窯が検出されている。C 群瓦窯では A 群で検出された船底状遺構と掘立柱建物が検出されている。C 群瓦窯の焚口ラインは A 群瓦窯の焚口ラインとはほぼ一致する。最も南に位置する 7 号窯の中軸は、A 群瓦窯の 6 号窯の中軸から 48 m の距離があり、これは、A 群の両端の瓦窯の心々間距離を 2 倍した距離に相当する。これらのことから、C 群瓦窯も A・B 群瓦窯と一体的な計画性のもとで構築されたことがうかがえる。当該地の西側には約 5.5m の崖があり、近年行った測量調査成果によると、この崖面が大山崎瓦窯の操業時の地形をある程度残している可能性があることが分かった。

今回の調査区は天王山山麓から続く山裾の緩斜面であり、IK77 次調査で検出された瓦廃棄土坑 SX01・09 の東側に当たる。この SX01 から溝状に伸びる SX09 の延長部分及びその付属施設の有無を確認することを主目的として調査を行った。調査にあたり、2～8 号窯の焚口ラインと 8 号窯の焚口中軸ラインの交点を起点に 5m 間隔でグリッドを設定し、トレンチを設定した。



第2図 周辺の調査と調査位置図 1:5,000

## 2. 調査経過

本調査は遺跡の範囲確認調査として、令和6年1月24日～3月25日に実施した。

## 3. 基本層序

基本層序は、隣接地で実施されたIK77次調査に準じ、1～4層に区分した。ただし、IK77次調査の第4・5層はいずれも地盤層の区分であることから、本調査では4a・4b層とした。第1層は暗灰色壤土で表土である。第2層は暗褐色シルトで、含有物の違いにより2a・2b・2c層に区分した。2b層上面で遺構面を検出した。第3層は黄褐色粘質土である。第4層は礫を多く含む黄褐色系の粘質土で、当該地の地盤を形成する堆積層である。含有物及びしまりの違いにより4a層と4b層に区分した。第4a・4b層上面で遺構面を検出した。

## 4. 検出遺構

### (1) 近世の遺構

溝SD03 幅0.5m、深さ0.2mを測る東西溝である。溝の走向はN71°11'42"Wである。

溝SD12 幅0.7m、深さ0.2mを測る東西溝である。溝の走向はN71°27'43"Wである。SD03と平行であり、当地が近代に茶園であったことから、農園用の排水溝や区画溝であった可能性がある。

不明土坑SX06 長軸1.1m、深さ0.3mの土坑である。

不明土坑SX07 長軸方向の長さ0.9m、短軸方向の長さ0.5m、深さ0.2mを測る土坑である。位置、検出高及び埋土の類似性から、IK77次調査で検出したSX07と同一遺構と考えられる。IK77次調査では古代の遺構と報告されているが、堆積状況から近世の遺構といえる。

ビットP08 径0.2m、深さ0.2mを測るビットである。

### (2) 古代の遺構

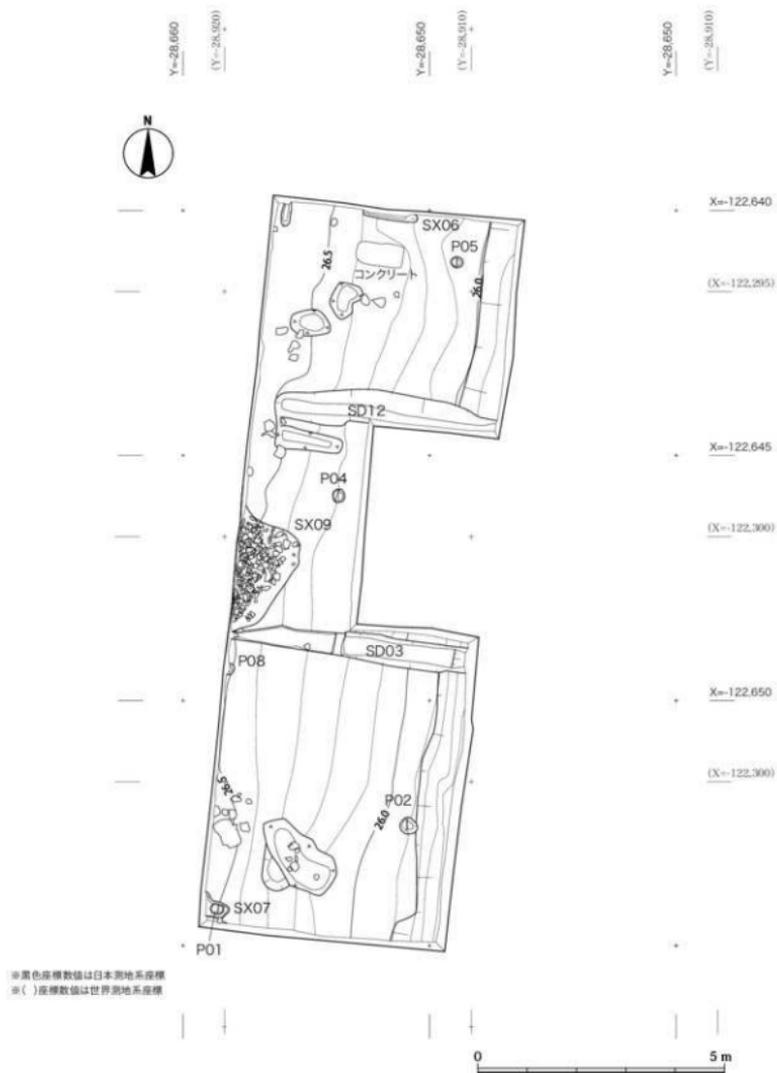
ビットP01 直径0.2m、深さ0.08mを測るビットである。SX07の埋土下、底面で検出した。

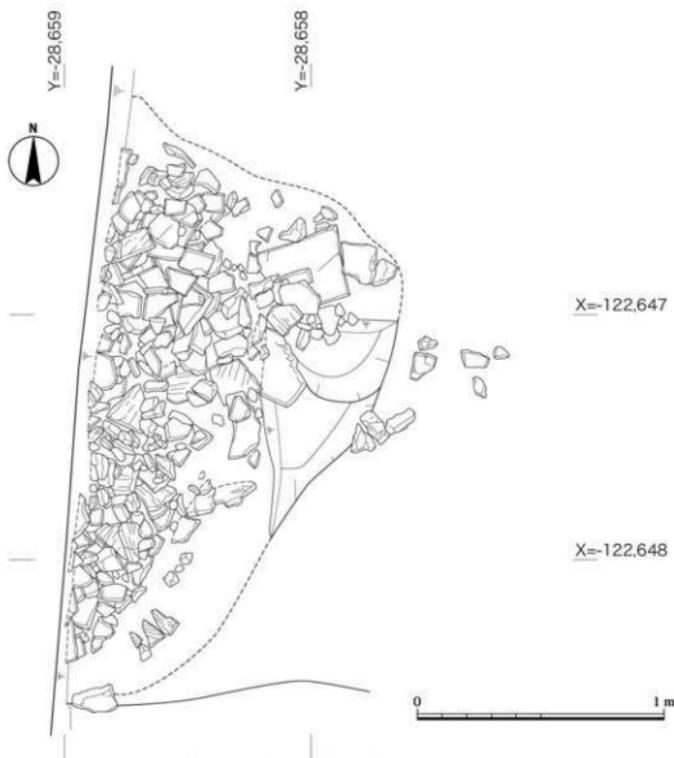
ビットP02 径0.3m、深さ0.2mを測る。

ビットP04 径0.2m、深さ0.2mを測る。

ビットP05 径0.2m、深さ0.1mを測る。

土坑SX09 検出幅2.5m、検出長1.2m、東端部分の深さ0.1mを測る瓦廃棄土坑である。位置及び瓦廃棄状況の類似性から、IK77次調査で検出したSX09と同一遺構と考えられる。ただし、IK77次調査ではSX09の埋土に炭化物や焼土が含まれていた旨が報告されているが、今回検出した部分の埋土には含まれない。SX09はSX01と接続する不整形の溝状遺構で、東側の先端部分を一部掘削して遺構の東端部を確認した(註1)。





第7図 SX09 遺構平面図 1:20

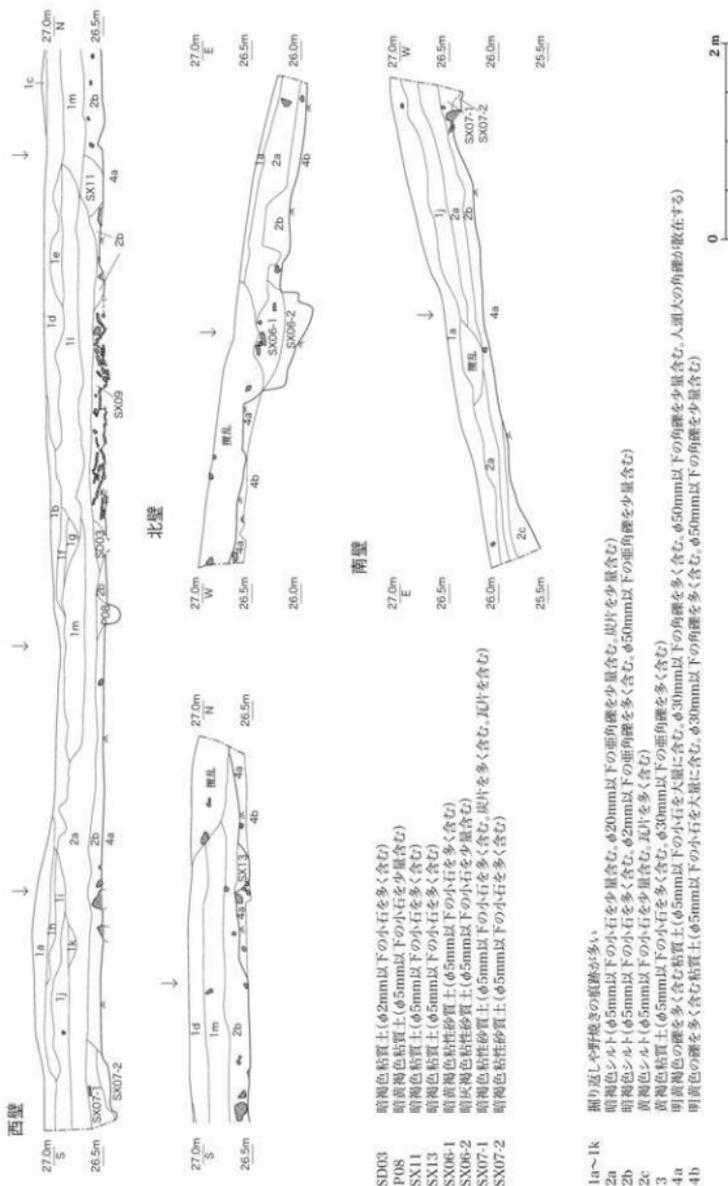
## 5. 出土遺物

本調査で出土した遺物に報告する。なお、年代観について、平安時代以降の土師器については平尾政幸 2019 を参考にした。

### (1) 平安時代の出土遺物(第10図～11図1～10)

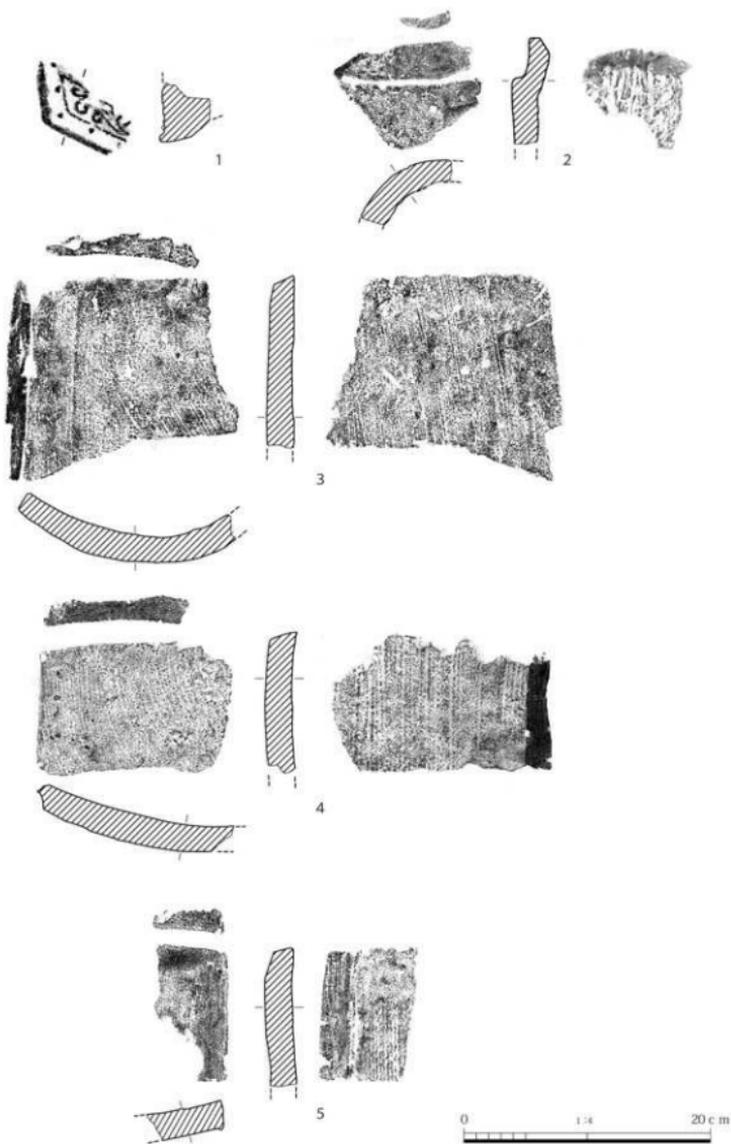
1は均整唐草文軒平瓦である。左脇区及び左第1単位のみ的小片であるが、同范を確認するに当たり次の点において文様に特徴がある。

1. 蕨手の部分が円形ではなく楕円形～逆「つ」字状である点。
2. 下外区左端の珠文が左脇区下端の珠文と離れている点。
3. 左第1単位の外側に子葉が1枚表現される点。

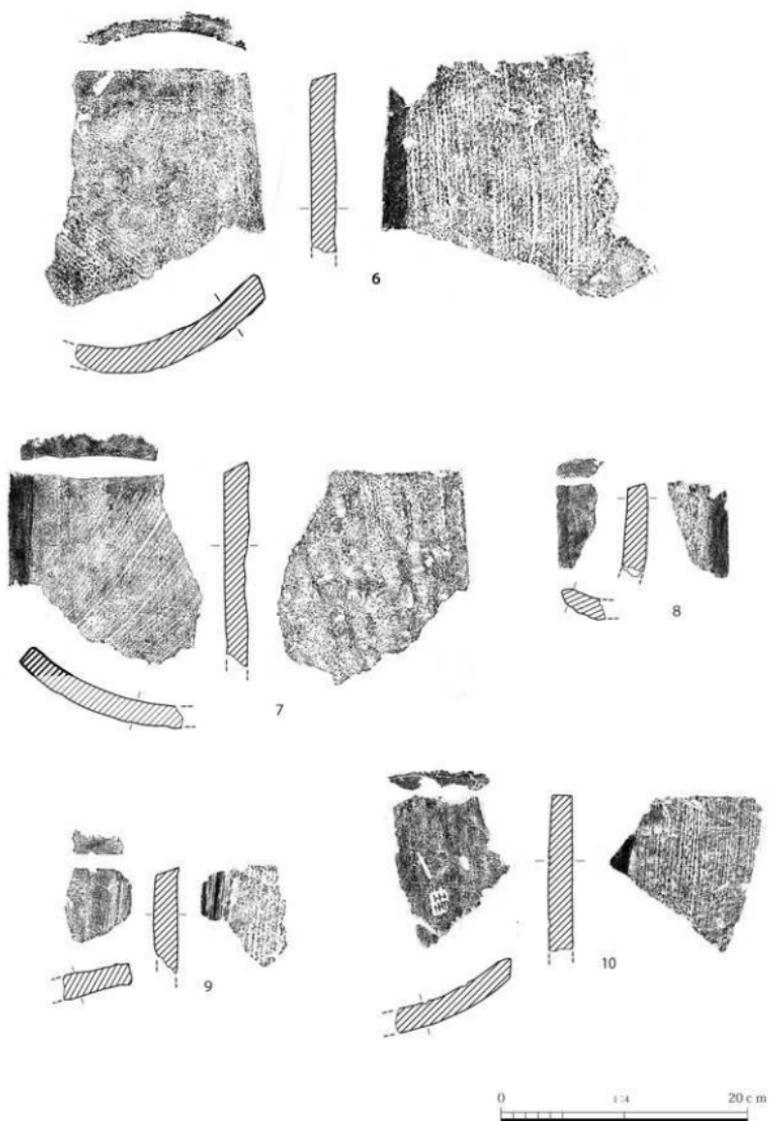


第8図 遺構断面図 1:60





第10図 遺物実測図(1) 1/4



第 11 図 遺物実測図 (2) 1:4



第12図 報告番号1、NS209、7757 Cの比較

## 4. 第1子葉の蕨手の中心を通る下外区界線の垂線上に下外区左端の珠文が位置する点。

これらの特徴を元と同範例を確認すると、大山崎瓦窯出土軒平瓦には同範品はない。また、平城京以前の宮都の出土瓦にも同範例がない。長岡宮式軒瓦7757C型式、西賀茂瓦窯出土のNS209と酷似する。本例と7757Cは計測値ではほぼ一致しているが、一致する範傷はなく、唐草文先端の巻き込みが本例の方がやや緩い。また、上向きに巻き込む蕨手の形状が、本例の方がひらがなの逆「フ」字状であり、扁平であることが相違点としてあげられる。さらに、界線の弧も本例の方が直線的であるため、同範とはみなせない(註2)。NS209は蕨手が楕円形へ逆「フ」字状を呈しており、両者を判別するのが困難であるほど酷似しているが、唐草の巻き込み方に若干の差異があるようにも思われ、本出土例のみをもって同範の認定をすることは困難である(第12図)。ここではNS209型式を最有力の類例と位置づけ、大山崎瓦窯で成立した独自型式である可能性もあると指摘するにとどめた。いずれにしても、大山崎瓦窯では初の出土例である。排土からの出土であり、評価は慎重にならざるを得ないが、古閑2022によればNS209型式は長岡宮式軒瓦7757Dの系譜を引く型式であり、NS204を経てNS209に至り、大山崎瓦窯OY202に影響を与えたとされる。この系譜に鑑みると、本例はOY202の系譜を考えるうえで有力な出土例といえる。NS209と同範であれば、範が西賀茂瓦窯から移動し、瓦窯内でOY202に直接的影響を与えたということができ、新形式であればNS209とOY202をつなぐ型式ということができよう。

2は丸瓦の玉縁部である。

3～9は平瓦である。大山崎瓦窯産で、糸切り痕が明瞭に残る。凸面はタキ技法である。

10は「理」の刻印がある平瓦である。大山崎瓦窯ではこれまでもA群瓦窯において「理」の刻印がある瓦が4種出土している(古閑正浩2022)。本例は、「里」の右上が刻印の界線と一部接するもの(古閑2022の報告番号256)と同じ原体であり、平城宮g種とも同じである(第13図)。同報告によれば、大山崎瓦窯出土の「理」刻印瓦は平城宮所用瓦の再利用品であるとのことであり、本例もそうした脈絡の中で位置づけられよう。

## (2) 近世の出土遺物(第14図11~17)

11は土師器皿である。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたと考えられる。室町時代後期~末期に位置づけられる。

12は桔梗文軒丸瓦である。5枚の花弁全ての弁端を、弁のふくらみを抑制するようにユビオサエしている。IK77次調査で検出された近世の石段を西側に延長すると現在の観音寺裏手の門に行き着くことを踏まえると、調査地が観音寺の参道の一部となっており、その関係で当地から出土したと考えられる。なお、現在の観音寺に葺かれている桔梗文の軒丸瓦の花弁は多くが凹型である。本出土例の調整は、もともと凸型だった弁端を凹型にするための対応だった可能性がある。なお、角早季子2018でも本例と同文の軒丸瓦を報告しており「桐の花の文」とされているが、正しくは桔梗文であるのでここで訂正したい。

13・14は近世の平瓦である。

15は切羽である。

16・17は元禄10(1697)年以降の寛永通寶である。

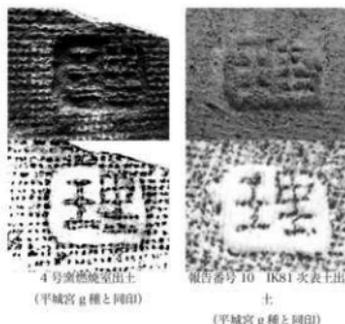
## 6. まとめ

今回の調査ではIK77次調査で検出されたSX09の東側延長部を検出した。IK77次調査で検出したSX09北断割では底部の標高は26.6mであったが、今回検出した東端の底部は26.2mであり、東側に向けてゆるやかに傾斜していることが判明した。現状、遺構掘方の形状からは北西側へとさらに広がる可能性がある。本遺構が焼成品の選別のために掘削された廃棄用の土坑であるのか、それともSX01に付属する排水施設として捉えるべきなのかは今回の調査では判断できなかった。

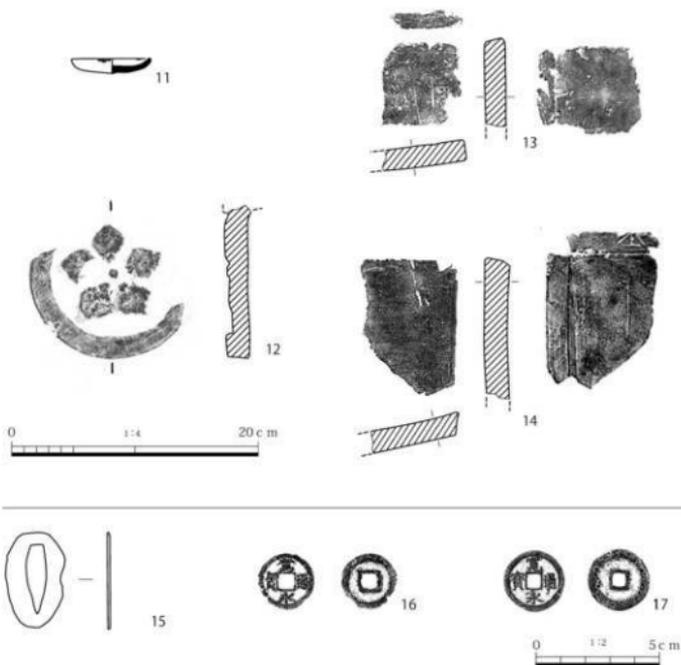
また、報告番号1の軒平瓦は大山崎瓦窯における初めての出土例である。長岡宮式7757Cや西賀茂瓦窯NS209と類似しており、操業の初期に生産されたものと位置づけられよう。一方、NS209から影響を受けたOY202は大山崎瓦窯の独自産であり、現在はA群からしか出土していない。今後の調査成果によりA群~C群の操業期間や文様系譜が詳らかになり、大山崎瓦窯の操業体制や瓦窯変遷の研究がますます進展することを願う(註3)。

### (註)

- (1) SX09はIK77次調査において埋土の断割を行っているため、今回の調査では遺構保存の観点から東端部分の掘削のみを行った。掘削部分には崩落防止のための土のうを



第13図 「理」銘刻印平瓦(凹面) 原寸



第14図 遺物実測図(3) 1:4 (15~17は1:2)

入れたうえで遺構全体を土のうで保護して埋め戻した。

(2)公益財団法人向日市埋蔵文化財センターのご厚意により企画展示中だった7757Cを本出土例と比較させていただいた。記して感謝申し上げます。

(3)平安時代前期の平安宮所用瓦生産瓦窯の変遷史をはじめ、今回出土した大山崎瓦窯としては新形式となる軒平瓦の類例と長岡宮式軒瓦から続く文様系譜についてや、「理」銘刻印瓦の意義など、大山崎瓦窯のもつ歴史的・資料的価値について、京都府教育委員会文化財保護課記念物係の古園正浩氏からは大変多くのことをご教授いただいた。また、IKSI次調査に際しては現場まで足をお運びいただき、ご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

#### [参考文献]

古園正浩 2022 『史跡大山崎瓦窯跡』大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第33集 大山崎町教育委員会。

角早季子 2018 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第53集 大山崎町教育委員会。

奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告VII』。

平尾政幸 2019 『土師器再考』『洛史 研究紀要』第12号 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所。

表2 大山崎瓦窯出土刻印瓦一覧表

瓦種	形状	寸法 (mm)				重量 (g)	備考
		長さ	幅	厚さ	高さ		
6号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
5号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
4号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
3号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
2号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
1号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
無刻印	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
1号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
2号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
3号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
4号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
5号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		
6号瓦	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
	刻印瓦	110	70	10	10		
小計		5	5	5	5		

表3 出土遺物観察表

報告番号	遺跡番号	種類	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色相		土質	内面	外面	焼成	埋存度	備考
							内面	外面						
1	5	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
2	14	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
3	8	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
4	8	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
5	3	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
6	7	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
7	11	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
8	1	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
9	2	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
10	9	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
11	12	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
12	16	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
13	4	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
14	15	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
15	13	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
16	16	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字
17	17	刻印瓦	瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字

表4 出土瓦観察表(軒丸瓦)

報告番号	遺跡番号	種類	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色相		土質	内面	外面	焼成	埋存度	備考
							内面	外面						
軒丸瓦	12	10	軒丸瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字

表5 出土瓦観察表(軒平瓦)

報告番号	遺跡番号	種類	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色相		土質	内面	外面	焼成	埋存度	備考
							内面	外面						
軒平瓦	1	5	軒平瓦	110	70	10	黄褐色	黄褐色	粘土質	内面：刻印	外面：無刻印	焼成	埋	刻印文字

---

---

# 圖版

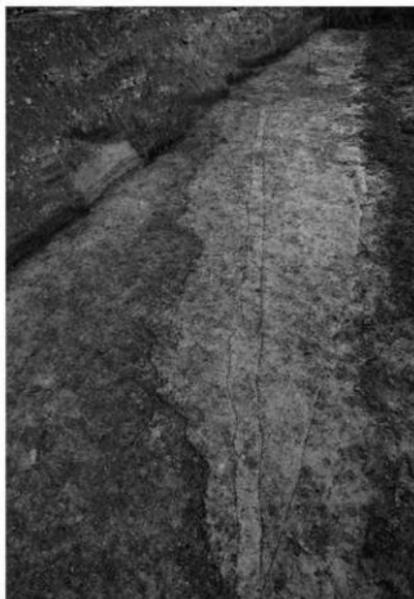
---

---





1 調査区北半 (南西0-5)



2 SD101 検出状況 (南西0-5)



3 調査区南半 (南東0-5)



4 P109 検出状況 (南西0-5)



1 P 106～108 検出状況 (西6-5)



2 P108・109 検出状況 (西6-5)



3 土層断面4 検出状況 (東6-5)



4 土層断面4 検出状況 (東6-5)



1 調査前風景 (北から)



2 調査前風景 (東から)



3 調査区南半 (南東から)



4 調査区北半 (南東から)



5 瓦溜まり SX09 検出状況 (東から)



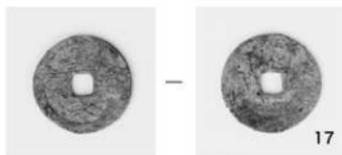
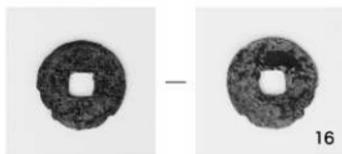
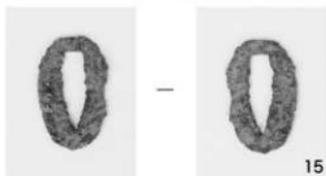
6 瓦溜まり SX09 検出状況 (東から)



7 瓦溜まり SX09 東端掘削状況 (東から)



8 瓦溜まり SX09 東端掘削状況 (東から)



## 報告書抄録

ふりがな	おおやまざきちやうまいぞうふんかざいちやうさほうこくしよ
書名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第71集
編著者名	菅生薫
編集機関	大山崎町教育委員会
所在地	〒618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目3番地 電話 075-956-2101(代)
発行年月日	西暦 2025 (令和7) 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 久保川遺跡	乙訓郡大山崎町 字円明寺 小字里ノ後 26-1、 26-6、27-1、28-1	26303	18 21	34° 54' 28"	135° 41' 11"	20231020	160 ㎡	詳細分布
白味才道跡 (史跡大山崎瓦窯 跡北側隣接地)	乙訓郡大山崎町 字円明寺 小字白味才 39-3	26303	32	34° 53' 38"	135° 41' 11"	20240124 ~ 20240325	53 ㎡	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 久保川遺跡	都城 散布地	奈良～平安時代 中世	溝・土坑・ 柱穴	土師器・須恵器	中世の耕作溝を検出した。
白味才道跡 (史跡大山崎瓦窯 跡北側隣接地)	瓦窯 散布地	平安時代 中世～近世	瓦廃棄土 坑・土坑・ 溝	土師器・丸瓦・平瓦・窠体・ すり鉢・銭貨	既往の調査で検出した 瓦廃棄土坑の東延長部 分を検出した。

---

令和7年(2025)3月10日 印刷

令和7年(2025)3月31日 発行

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第71集

編集・発行 大山崎町教育委員会

〒618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目3

電話 075-956-2101 (代表)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三

番町273

電話 075-467-5151

---







